

蝦夷瀧

り、瀧の上より十間餘の材木を流し落すに、瀧壺甚深くして、其材木眞逆様に瀧壺に入るに、ことごとく瀧壺に沈み入りて、しばらくしてやうやくに再び浮上るといふ、されば瀧壺の深さ何十間といふ底を玄りがたしとなり、誠にさも有ぬべく見ゆる瀧なりき。

〔久摺日誌〕廿七日〇年三月安政五
余武四郎浦は、土人三人を連て登岳○阿寒岳の事を議し、他は先に温泉に行待べしと申附出立す。○略申 倍小使エコレに明日瀑布を一見せんことを謀るに、幸此處に小舟の有る由、是にて岸に傍て瀑布に至り、其より四島を巡り來らんと語りぬ、先其行は一章の拙文に譲り置ぬ、

念八日、快晴、將到阿寒瀑布、首長惠方禮、棹小舟待余、南行五十丁、繫舟於赤壁下、亦行卅丁、而巍然嵯岩也、俯視石潭、其深不知幾仞、悍怒鬪激、岸勢犬牙差互、巨木掩日、瀑布懸橫互大、凡五十尋、高三百尋、狀如白龍下垂、或化珠玉、或起雲烟、千態萬狀、彷彿於那智、而幾倍於華嚴、衣霑髮堅膚粟、不能久留、賦國歌書木皮歌云、

いつまでもながめは盡じあかぬ山妹背の中に落る瀧津瀧

山姫のさらせる布もふるければ妹が白髪と我こそは見ゆ

亦棹舟、遶四島而歸、日已申、余自幼好遊、盡大八洲、終到蝦夷唐太、未見如此瀑布、使之在近畿、則貴游之士續々不絕、今僻在茲土、不有一人識者、何造物者之慳吝耶、抑瀑布之不幸也、世之類此者多、可歎哉、

水面風收夕照間、小舟撐棹沿崖還、忽落銀峯千仞影、是吾昨日所攀山、